

## 地域研究

# 都市中心部のまちづくりのための都市河川の活用 ～市民パートナーシップによる足羽川活用モデルの形成に向けて～

Practical Use of the Municipal River for the City Planning of the City Central Part  
～ Turn to Formation of the Asuwa River Practical Use Model by Citizen Partnership ～

小川雅人\*, 神崎洋治\*\*, 今村善信\*\*\*

はじめに

- I. 本調査研究の概要(要約)と活動経過
- II. 住民参加に関する理論の整理と方向
- III. 本調査研究における実態調査と主な結果
- IV. 足羽川の利活用とまちづくりに関する住民参加のあり方  
資料

本稿は、平成22、23年度にわたり実施した福井県の行政課題「足羽川の利活用にかかる調査研究」(行政課題15)の受託研究の報告書を編集・整理したものである。

足羽川、足羽山は福井市民にとってかけがえのない象徴的な自然資源である。そのなかでも足羽川は福井の市民をはじめとする企業・行政などの関係各主体は足羽川を後世へ継承する義務がある。ただ、現状を鑑みるに足羽川は市民にとって心理的距離は決して近くないように思われる。足羽川には古くから市民は深い愛着と郷愁を抱いていた。平成9年の法改正の時に河川法は治水、利用に加え環境保全の趣旨が明記され、リバーフロント整備が各地で進展している。しかし、平成16年の足羽川の氾濫は市民に河川災害の恐ろしさがまだ市民にとって鮮明な記憶となって残っていて、堤防を含む河川改修が終了しても、まだ市民がかつて足羽川で遊び、親しんだ都市河川の持つリバーフロントの利活用は進んでいない。足羽川に愛着を持っている市民は、復興に向けた改修が一定の段階を終わったところで、行政などの関係主体が進める河川の維持管理、利活用についても参画・連携し、日常生活空間として利用できるよう、市民参加の仕組みを確立し、パートナーシップに基づく仕組み作りが必要である。本稿は足羽川の利活用について市民参加のモデルを構築し、中心市街地との連携強化の方向を探るものである。

**キーワード：足羽川、ワークショップ、住民参加、合意形成、まちづくり**

\* 本研究の代表、福井県立大学地域経済研究所教授  
本稿の文責は代表にある。

\*\* 福井県立大学地域経済研究所客員研究員

\*\*\* 福井県立大学地域経済研究所客員研究員

## はじめに

福井市民から深い愛着と郷愁を持たれている足羽川は、平成16年の氾濫による恐怖の記憶いまだ完全に消えていない。足羽川はハード面の改修が一段落し、リバーフロントとしての整備はこれからという段階まできた。足羽川の復興が一段落した今、市民参加型の利活用の検討が必要になっている。そこで本研究は、足羽川の利活用に住民参加によるまちづくりとの関連の中で何らかのモデル形成が必要と考え、調査研究をした。

本稿は足羽川の利活用について市民参加のモデルを構築し、中心市街地との連携の強化の方向を探るものである。

調査研究の視点としては、市民参加型活用モデルを形成する足羽川河川敷利活用と中心部との連携のパートナーシップのあり方の研究に絞る。関係者・市民グループに対してインタビュー調査を中心とした調査研究で、土木学的視点ではなく、都市論、消費文化論に基づく調査研究である。

## I. 本研究の概要（要約）と活動経過<sup>1</sup>

### 1. 本研究の仮説

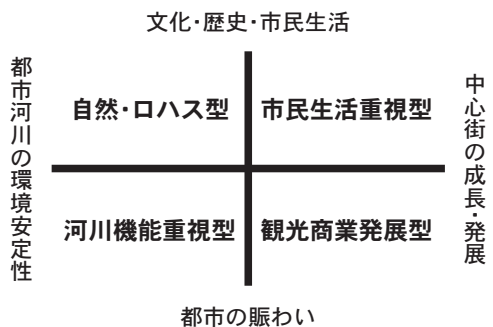
本研究は福井県からの行政課題であり、足羽川の利活用についてであるが、研究課題として提案されている中心市街地のまちづくりとの連携についても検討していく。利活用を検討するに市民、住民がいかに主体的に参加し、活用していくかについて住民参加の視点から進めることとした。従って本研究は都市論・消費文化論に基づいた視点で進めた。研

究対象領域は、足羽川河川敷と福井市中心部との関連を見ていく。

足羽川については自然資源として着目し、継承されていくべき市の象徴的自然として捉える。しかし、それにもかかわらず、どこか遠い存在となっている感が否めない。そこで、利活用について市民・組織連携による利活用を模索する。研究視点として、①「誰か」に頼るのではなく、みんなで言うまちづくり。また、②合意形成のためのプロセスを重視した。本研究の仮説としては次のように考えた。

- ・地域活性化への市民参加がどのように行われているのか、明確ではない  
→明確になれば、交流が生まれる
  - ・どのような特性を持った人が地域活性化を担っているのか、明確ではない  
→明確になれば、役割分担ができる
- 以下においてこの仮説を実証していく。

消費文化論に基づく仮説のタイプ分類<sup>2</sup>は次のマトリックスによる。



仮説に基づくタイプは、二つの軸によるマトリックスで分類する。一つは「文化・歴史・市民生活」と「都市の賑わい」の軸である。もう一つの軸は「都市河川環境安定性」と「中心街の成長・発展」の軸である。これらの2軸についてどちらを重視するかによつ

て分けた。タイプとしては、次の4つである。

観光・商業発展型	「まち」と「かわ」両方の賑わいを重視
河川機能重視型	「まち」と「かわ」の役割分担
自然・ロハス型	自然環境の保全を重視
市民生活充実型	生活の中のひとつとしての位置づけ

生活スタイルや価値観の違いにより足羽川の河川敷の利活用と中心街との関連をどのように進めていくか、参加の形態についての違いを見ていこうとするものである。

## 2. 本研究の経過

### ①平成22年度の活動実績

平成22年度は、研究企画、調査実施、ヒアリング等について研究会を開催して進めていった。特にヒアリングについては県内外の先進事例を調査した。県外で河川利活用に取り組む団体として、東京江戸川区の「荒川クリーンエイドフォーラム」である。NPOを中心に市民・企業が連携して都市河川を維持・活用している。第2は、東京都世田谷区の「北沢川せせらぎクラブ」である。世田谷区管理事務所と住民組織がコラボレーションしていることで知られている先進事例である。

県内で足羽川利活用に取り組む団体・組織についてのヒアリングも実施した。以下の3箇所であるが、都市河川は、利活用するについて親水性を検討するについては、水質が重要である。足羽川の上流の活動団体として「池田町」の住民組織の活動と池田町町長についてヒアリングした。池田町は、都市河川上流での町・住民連携のまちづくりで知られ

ている。第2は、都市河川上流でのNPOと市民のまちづくりで有名な「美山のまちづくりNPO」である。もう1箇所は、足羽川を含む九頭竜川全体の活動を実施している「ドラゴンリバー交流会」である。

### ②平成23年度の活動実績

平成23年度は、実態把握と仮説検証の調査研究を実施した。一つは、足羽川河川敷を実際に利用している人についての調査である。調査は桜の時季や市の大きなイベントがある時以外は決して利用者は多くはない。調査結果については後述するが、主な利用理由は「散歩」で6割以上が一人である。

河川敷利用者の行動と意識に関するアンケートは、足羽川河川敷でのアンケート調査は7月、10月の計2回実施し、約70名から回答を得た。調査内容としては、「活動タイプの分類」、「足羽川との関係性」、「足羽川の利活用方法」、「足羽川のイメージ」、「中心市街地との連携方法」などである。アンケートを通じてワークショップ参加者も確保した。

2つめは、グループインタビューである。これは、グループインタビュー方式、ワークショップ形式で行った。内容としては、有識者に対してのグループインタビューである。仮説立案のための高次元の内容で、足羽川の利活用、広域まちづくり、住民の参加推進についてである。第2は、各層へのグループインタビューで、利活用、住民の参加推進、まちなかとの連携について調べた。3つめは、ワークショップである。今回の調査研究で最も重視した研究のプロセスである。住民参加を図る場合のプロセスと方向の検証を図る上で欠かせない内容である。ワークショップは3つ住民タイプで実施した。

- ・ 経営者・勤務者のワークショップ 利活用, 市民の参加推進, 中心市街地との連携
- ・ 学生とのワークショップ 利活用, 市民の参加推進, 中心市街地との連携
- ・ 中高年とのワークショップ 利活用, 市民の参加推進, 中心市街地との連携

後述するように, 活動タイプとしては積極的な参加意欲を持つ人が7割を占めたため, パタン分類は必ずしも各タイプについて全体的に実証はできなかったが, 参加プロセスについての実証はできた。

4つめは先進事例ヒアリングである。利活用に取り組んでいる河川と関連組織の先進事例のヒアリングである。特に, 福岡県直方市の遠賀川の事例は, 本研究にとっては合意形成のプロセスや組織運営などについては結論に参考となるものである。

第1は, 加古川(兵庫県加古川市)の流域連携とスポーツによる活用事例である。加古川市役所, 姫路道路河川事務所を訪問して現地を案内してもらいながら丁寧なヒアリングをした。第2は, 遠賀川(福岡県直方市)の「夢プラン」による市民との合意形成の事例である。直方市役所, 直方川づくりの会を訪問し, 詳細な現地視察, ヒアリングをした。住民参加の合意形成としては全国的にも優れた事例で, 本研究にも大きな示唆をもらった。

### 3. 仮説の検証と成果

#### ①仮説の検証

ワークショップ参加者は「観光・商業発展型」の意見が多くを占めるため本稿はこのタイプに基づいて分析する。その中でも, 後述

するが, 足羽川は「憩いの場」として位置づけている。

キーワードで見る特徴は, 活動主体は市民組織・住民・行政である。必要なのは, 市民組織を中心とした合意形成, 近隣を含めた住民の活動への参画, 行政による活動の補助である。また, 擬陽性の役割として, ①住民主導の市民組織へのアドバイス, ②住民としての市民組織への加盟, 活動への参画, ③国・県・市等とのコミュニケーションのコーディネートである。

#### ②活動の成果: 合意形成の4ステップ

- ・ 情報と危機感の共有 「将来の夢」の共有と公開
- ・ 主体間の交流, 相互理解・学習 個人資格での参加, 専門家はアドバイス
- ・ 役割分担による実践, 信頼関係の醸成 各々の提案・学習への責任, 夢をカタチに
- ・ 合意形成 「誰が」・「いつまでに」を敢えて決めない

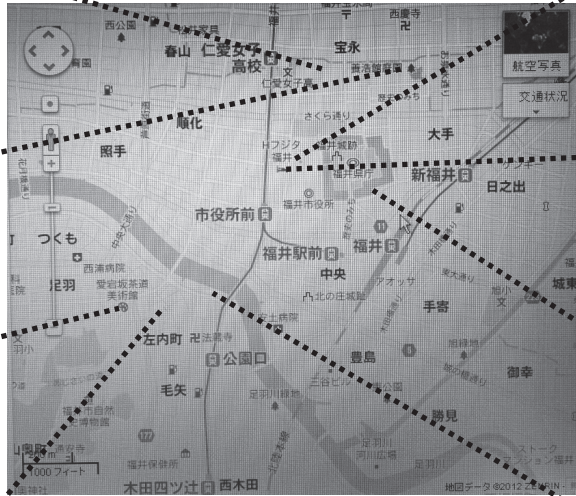
#### ③活動の成果: 市民からの利活用提言

- ・ アクセスの改善 自動車・自転車でのアクセスに難あり
- ・ 利用の規制緩和 「どこに」・「何を」相談するの分かりづらい
- ・ 自主的な運用 地域住民や高齢者ボランティアとの連携が薄い
- ・ 観光への注力 歴史資源の活用, スポーツ環境としての整備

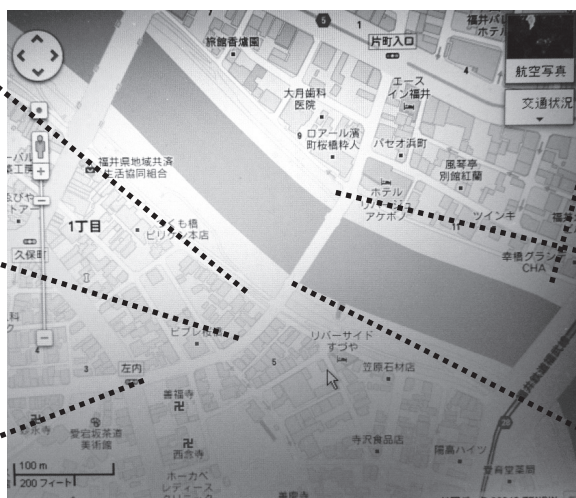
#### ④活動の成果: 具体的な利活用方法

- ・ 屋外駐車場としての整備
- ・ コミュニティバスでの駐車場設置
- ・ まちあるきルートの設定
- ・ 「ハレ」の場としての活用
- ・ 景観の統一による, 連続性の演出

⑤まちあるぎルート（幕末偉人銅像）



⑥景観の統一（桜橋～愛宕坂間）



⑦まとめとしてキーワードで示せば次のように表現できよう<sup>3</sup>

- ・時間をかけた丁寧な合意形成  
50年後を見据えた「憩いの場」としての計画づくり，市民組織・住民・行政によるコンセンサスの形成
- ・息の長い市民組織による活動  
合意形成の場，実行部隊としての活動，「緩やかな」連帯感による，気軽な参加，意見と学習に対する責任の醸成
- ・行政の活動に対するバックアップ，コーディネーター，専門家としての役割

## II. 住民参加に関する理論の整理と方向 －消費文化論<sup>4</sup>に基づく整理－

ワークショップ参加者の足羽川とまちづくりに関する志向性とその背景を位置づけることで，利活用に関する方向性を規定している要因を明らかにする。

消費文化論による定性的で解釈的な調査手法を用いることによって参加者それぞれのまちづくりにおける志向性を示すことができる。

消費文化論調査の手法においては必ずしも普遍的な成果を得ることを規定とするのではない。今回調査対象としているのは各層の住民である。しかし，調査対象の住民は必ずしも普段からまちづくりや足羽川の河川敷の活用に積極的に関与している人だけではない。

とはいえ，2つの点で，その分析を行うことに積極的な意味を見いだすことができることを確認しておきたい。第1は，ワークショップ参加者は福井市民であり，これまで数多く，福井市中心街や足羽川の河川敷を利用し

た経験を持っている。他の都市の河川敷とまちづくりについて類似性を有することを指摘できる。第2は，年齢，性別，職業など様々な経歴を持つ参加者であり，特定の層に限定した分析ではない。最もこのような調査とは別にまちづくりや河川敷の利活用について社会経済的な枠組みから相対的な分析が必要であることは敢えて指摘しておきたい。

消費文化理論調査の目的は「社会科学的で，経営的で公共政策的に高度に関連する問題を紹介することである。消費者の生活文化によって生み出され，人々の基本的な経験やプロセスを構築し，自然や社会的カテゴリーの動態と交錯する消費文化はダイナミックに形成され変化する。」<sup>5</sup>Arnould and Tompsonによれば，消費文化理論は①消費者アイデンティティ，②市場文化，③消費の社会的パターン，④消費者解釈戦略の4つの領域に関連した研究であるという。

①消費者アイデンティティは，消費サイクルを経験の側面から明らかにする。

②市場文化は，文化の媒介者である消費者は文化の制作者でもあるという。人々の体験が文化環境と密接に関連しているという。

③消費の社会的パターンは，消費に系統的に影響を及ぼす制度上及び社会的に構造であり，マクロの消費パターンに強く結びつく。

④消費者解釈戦略は，マスメディアによる消費イデオロギーを消費者が再定義する仕方を捉えることで消費者の求めを明らかにする。

今までの参加型まちづくりや河川敷の利活用について明確に位置づけることのできなかつた参加者の特性と意識について焦点を当てた。ワークショップ参加者は地域の経営者，

住民、学生、研究者、まちづくり活動家など多方面の参加者である。ワークショップでの発言やインタビュー等を通じて解釈的に捉え、まちづくりと足羽川河川敷利活用がどのように施行され決めるべきかについてその関係性を明らかにする。

都市の機能としての中心市街地は、消費者の地域的分布の変動やニーズの変化に対応し、郊外型の大型ショッピングセンターの自由な参入・撤退を促進し、都市の広域的拡散を背景として発展と衰退を余儀なくされてきた。結果として都市における商業集積の空間的偏在すなわち中心部の空洞化をもたらし、消費生活の利便性と安全性を損なうこととなった。

これらの都市の発展と衰退は生活者の生活利便性の課題だけでなく、生活者の減少とともに都市の環境安定性にも課題を投げかけた。都市生活を楽しむ施設的・自然的文化に対しても危機感を増幅させる結果となった。

中心市街地の空洞化は商業的課題だけでなく、都市の自然文化の保全・開発に燃えて今日を与えた。この背景には、生活者としての住民意識の希薄化をも醸成した。しかし、近年商業者をはじめとする住民の手による環境改善・安定性の意識が行動となって表れている。

例えば、浜町通りの文化的環境改善、足羽山の環境整備等の活動は住民による都市の発展と環境安定性を実践する活動例である。この視点についての先行研究は数多いが、特に宇野史郎（1998）<sup>6</sup>は、都市の発展と環境の安定性について関連を重視している。

そこで、都市の発展と環境の安定性について2つの軸を設定した。縦軸に都市の重視さ

れるべき機能として文化・歴史・市民生活と都市の賑わいを対局におく軸と、都市河川の目指すべき方向性として都市河川の環境安定性（保全）と中心街との関連性の強化を対局におく軸である。これによって4つの象限に属するワークショップ参加者を位置づけた。

①観光・商業発展型と呼ぶのは、「都市河川の中心街との関連性の強化」と「都市の賑わいを重視する」グループである。②河川機能重視型と呼ぶのは「都市河川の環境安定性（保全）」と「都市の賑わい」を重視するグループである。③自然・ロハス型と呼ぶのは、「文化・歴史・市民生活」と「都市河川の環境安定性（保全）」を重視するグループである。④市民生活充実型と呼ぶのは、「都市河川の中心街との関連性の強化」と「文化・歴史・市民生活」を重視するグループである。

あなたはA Bそれぞれについてどちらに近いですか

A 足羽川の目指すべき方向

- a 環境の安定性を重視すべき
- b 中心街の活性化に活用すべき

B 都市の重視すべき役割

- c 生活文化歴史を重視すべき
- d 都市の賑わいを重視すべき

上記の質問についての回答bdは①観光・商業発展型、回答adは②河川機能重視型、回答acは③自然・ロハス型、回答bcは④市民生活充実型として分類した。

仮説としては次のように考えている。

①観光・商業発展型は、都市の発展賑わいを重視し、積極的に活動に関わっていくタイプである。参加型の活動には最も向いている

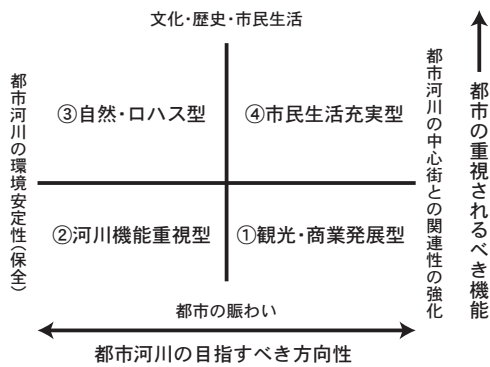
グループである。

②河川機能重視型は都市の発展を重視するが、足羽川を含む自然環境とは必ずしも結びつけない。中心街とのにはあまり関心を示さないタイプである。

③自然・ロハス型は、積極的に賑わいを意識せず、むしろ自然環境を重視するタイプで開発より自然を好むタイプである。住民参加としては比較的関心の少ないタイプである。

④市民生活充実型は中心街と足羽川の関連は重視するが、都市の発展、賑わいより生活の中の一つとして位置づける。生活との関連には興味を持つタイプである。

図表-1 消費文化論に基づく市民組織のタイプ分類



### Ⅲ. 本調査研究における実態調査と主な結果

今回の調査研究で最も重視した研究のプロセスは実態調査である。ヒアリング調査、ワークショップ及び利用者アンケート調査である。ヒアリング調査は先進事例調査、有識者グループインタビュー調査である。これらの調査の大きな目的は、仮説の設定と確認のためである。先進事例調査は、都市河川をす

で住民参加で利活用している例、河川の上流や流域全体で河川の利活用をしている事例で、本研究にとって非常に重要な示唆と結論の確認を行った。

また、ワークショップは、住民参加を図る場合のプロセスと方向の検証を図る上で欠かせない内容である。ただ、今回の消費文化論に基づくタイプ分けは、地域の活性化の活動に対して積極的で、自らのライフスタイルも能動的である「観光・商業発展型」の人が大半であった。調査対象が結果的に足羽川やまちづくりに強い思いを持ち、すでに活動している人達であった住民であり、「観光・商業発展型」以外のタイプの行動と意識を捉えることはできなかった。そのため、タイプ分けをした分析は本稿では触れない。

ワークショップは3つ住民層で実施した。対象と主な確認内容は次のとおりである。

- ・ 経営者・勤務者のワークショップ 利活用, 市民の参加推進, 中心市街地との連携
- ・ 学生とのワークショップ 利活用, 市民の参加推進, 中心市街地との連携
- ・ 中高年とのワークショップ 利活用, 市民の参加推進, 中心市街地との連携

#### 1. ワークショップ参加者の概要とタイプ

##### ①経営者、勤務者ワークショップ

男性6名, 女性3名

タイプ①6名, タイプ②~④それぞれ1名

住所: 福井市9名

##### ②学生ワークショップ

女性7名

タイプ①5名, タイプ②, ③各1名

住所 福井市5名, 鯖江市, 永平寺町各1名



- ③地域住民（中高齢）ワークショップ  
 男性 10人 50代3人, 60代5人, 70代2人  
 タイプ：タイプ①8人 タイプ②2人  
 住所：福井市5人, 鯖江市2人, 坂井市2人,  
 勝山市1人  
 女性 1人 60代1人 大野市 タイプ①

## 2. ワークショップ参加者の意見整理

### ①自営業者, 勤務者

#### 1) 足羽川河川敷をもっと活用してもらうためには

A班 タイプ①5名

##### ・世代別での利用

遊具のレンタル, 子供が利用しやすいようにする, 若い人のアート作りの場にする, カップル, 法人

##### ・駐車場の利用

駐車スペース, 自転車置き場を作る, 停留場を作る, 割引券

##### ・休憩場所として

露店などのスペースを作る, トイレを作る, ベンチを置く, 車に乗ったままシアター鑑賞する

##### ・運動を通しての利用

サイクリングコースを作る, ランニングコースを作る, 8号線から花月橋くらいまでをつなげる, スポーツができる環境にする, スポーツ施設（河川敷球場など）

##### ・雰囲気をよくする

展示会, 遊園地のような雰囲気にする, 花いっぱい足羽川にする, 芝桜やコスモスなど花の足羽川にする, ひまわりで迷路を作る

##### ・利用方法, 安全性

使いやすいルール作り, 簡単な手続き, わ

かりやすい窓口, 利用方法を明確に告知する, 茶店を出す, 川で遊べるような場所を作る, BBQ, 浮浪者対策

B班 タイプ①2名, ②～④3名,

##### ・快適に過ごすために

遊具があれば→法律でだめ→福井の法律, 川床を作る, 夜の灯り, 夏は涼しく冬は暖かく過ごせる空間施設, 屋根のある空間を作る, 四季の花畑, トイレ移動用

##### ・行事やイベントに利用

マラソン大会, まず地域や町内での活用をしてもらう（運動会など）, 使用方法の自由度を高める, 河川敷周辺が密集しすぎ→行きにくい, 車の展示会, 年4回四季のイベント, 利用法の告知（市役所の広報で市民に知らせる）

##### ・駐車場

駐車場, 駐輪場がない

##### ・清掃活動

川のなかの清掃

#### 2) 足羽川の利活用に市民, 市民組織が企画,

管理運営にもっと自主的に参加するには

A班

##### ・コミュニケーション

コミュニケーション不足か？

##### ・委託

第三者的な民間委託型（窓口施設）, 管理・運営できる団体に補助金を出す, 地元市民がする, 足羽川利用のために運営委員会を設ける（地元住民の公平な判断が難しい）

##### ・県, 市に対して

市役所内に県の出張所みたいなものを作る, 県のどこに相談してよいかわからない, 管理している県の方から看板なり広く知らせ

るべき、県・市のHPにわかりやすくリンクする、わかりやすい窓口を作る

・団体向け

関わった団体・法人が場所を優先して使えるようにする、企業・団体のPRに活用してもらう

・学校、PTA関係

流域のPTA・公民館を巻き込む、清掃イベント（ボランティア活動）、学校（幼稚園など）の散歩コース

B班

・清掃活動

地域住民持ち回りでの清掃、掃除活動、清掃活動（現在、年に1回）

・県、市に対して

県の河川課、市の公園緑地課両者の地域代表などでの共同運営組織、県と市の河川に対する考えが違う→統一の考えを持つ窓口を作る

・市民参加

堤防護岸に市民の手形パネルを作る、諸々の税金は無視して市民一人ひとりに1坪分買ってもらい自分たちの土地であると思ってもらう

・管理や運営を市民に任せる

市が自治体に活用を任す（例：4月は旭地区、5月は日の出地区など）、兩岸の地区民で手分けして管理する（活動や清掃など）、管理は役所・運営は民間の区分を、高齢者に管理を委託する（高齢者の活用）、近い地域の方々の神社の祭りの時は河川敷でも同じく、花などの管理（桜も含めて・住民たちが1年を通して）、花植え→市民の手で

3) 中心市街地との連携をもっと強化するためには

A班

・イメージアップ

2カ所に行かなくてはならない理由を作る、河川敷利用を多くするためには足羽川・足羽山全体のイメージアップが大事、歴史の掘り起こしあるいは伝承が大事

・交通

駐車場・駐輪場を設ける、足羽川の南側に駐車場を作る（無料）、交通アクセスを簡単にする、駅前から河川まで無料レンタサイクル、無料周遊バス、駅前から河川までを商店街化（緑化）通りに名称をつける

・イベント、PR

テレビ中継、ライブ中継、駅前イベントを河川敷でする（福井まつり）、中心部のお店をタイアップ（スタンプラリーなど割引制度）、足羽川からお堀周囲ランニングコース、フリーマーケットをする（北の庄でしている）

B班

・河川敷外堀化計画

河川敷外堀化計画→足羽川を外堀に戻し、城下町とのイメージを関連づける

・中心市街地と足羽川を結ぶ道

用水路を中心部（県庁お堀）と足羽川をつなげる（水の路）、桜の路を中心部にまで広げる、イルミネーションロードを作る（中心部→河川敷→足羽山）、桜橋から足羽山までの導線を（桜を植えて歴史、文化を感じる道路を）、駅前→幸橋→桜橋→足羽山までの周遊バス、幸橋と柴田神社の導線を一体化

・イベント開催

春はお花見宴会プラン・夏はビアガーデン

(舟1, 2隻)・秋は…冬は雪でモニュメント、夏の祭りのよさこいを河川敷で、中心部と河川敷で同日関連イベントを開催、駅前周辺と足羽川周辺で合同イベント、テレビ局・新聞社などのイベントは足羽川河川敷を使用

- ・中心市街地から足羽川まで散策

福井市主催散策ツアー（河川敷→足羽山→柴田神社）、ウォークラリーなどのイベント又は保育園児などの遠足（駅前→河川敷→駅前）、サイクリングコースを作る（レンタサイクル・持ち自転車で）

## ②学生ワークショップ

- 1) 足羽川河川敷をもっと活用してもらうためには

- ・清掃

落ち葉などを掃除し環境をよくする、雑草やゴミで野ざらしになっている敷地を整備する（福井特有の植木や花を植える→ちょっとした観光地に）、河川の清掃

- ・観光

ライトアップ、桜並木がもっとほしい（昔はもっとあったような…桜が少なくなったことが一番寂しい）、イルミネーション（電気…）、花畑（季節によって河川敷の色が変わるような）

- ・イベント

イベント（河川敷で）を開催する、イベント開催、四季に応じたイベント+花の名所（桜・あじさい・ひまわり・紅葉・雪祭り）、ウォーキングイベント（川の自然を楽しみながら）、ウォーキングマップやサイクリングマップの作成・配布、週末などに「川遊び講座」のようなものを開く（学校に掲示してもらう）

- ・宣伝

足羽川河川敷の魅力を紹介して興味を持ってもらう、足羽川を題材にした地元映画作り、テレビ中継を駅前だけでなく足羽川でも

- ・駐車場

駐車場の設置

- ・川の活用

舟遊び、川をもっと活用する（遊び…舟・カヌー・いかだ）、水と親しめるような遊具の設置（例：噴水）

- ・河川敷の利用

バーベキューなど市民が広く利用できるようにする、遊具、休憩場所の設置（日陰+ベンチ）

- 2) 足羽川の利活用に市民、市民組織が企画、管理運営にもっと自主的に参加するには

- ・主体（自主的に）

イベント運営を任せる、学生団体とタッグ（イベントの開催）、イベントとかで学生の参加者を募る（いろいろな学校の学生に任せてみる）、河川敷を区切ってそれぞれに任せる、教育現場での活用（小学校中学校での清掃やお祭り）、魚の稚魚の放流、健康促進活動（例：会社や町内会の行事の一貫として足羽川を歩こう走ろう）

- ・利益追求

目的を持って清掃をする（管理について）、「もっと活用してもらう」ことでのデメリットを減らす=メリットを増やす

- ・協力

イベントの開催の時に産・学・様々な分野に協力を得る、お年寄りと子どもが遊んだり学んだりするイベントの開催（老人会と児童の合同）

3) 中心市街地との連携をもっと強化するためには

・河川の利用

中心市街地の店が出前で足羽川へ届ける(茶屋など)、暑いときに歩いたり買い物のとき川で涼めたりできるような設備をつける(川床)、買い物した人にお茶のサービス、買い物した人がゆっくり過ごせる休憩所づくり

・安全重視の河川整備

安全重視・自然重視の人たちも納得できるような中心市街地との連携

・PR

駅前で足羽川の宣伝・足羽川で駅前の宣伝、足羽川のイメージキャラクターがまち(駅前)をねり歩く

・観光

屋形船、歴女向けツアー(中心に歴史的なものが多くあるため)、人力車(駅前から出る駅前足羽川ルート)、駅前から出る足羽川観光バスの運営、駅前から足羽川を桜でつなぐ

・イベント

イベント(祭り)でのスタンプラリー→抽選に参加できる、祭り(昼は駅前で夜は足羽川で)、足羽川と中心市街地の店舗とで発生するスタンプラリー・キャンペーンの開催、駅前の商店街と一緒に桜祭りをする・駅前のイベント時には足羽川を会場にする(合同イベント)、足羽川河川敷を含めた広い範囲にまたがるイベントの開催(中心市街地から気軽に足羽川へと足をのばせるようにするため)

・交通

イベントの時に運行するバスを出す、市街地と足羽川のバス(コミュニティ)を増やす、

駐車場(川)、交通の便をよくする、交通を便利にする(バス・自転車・電車など)、レンタサイクル

③中高年ワークショップ

1) 足羽川河川敷をもっと活用してもらうためには

・市、県、NPOのイベントとして河川敷を利用

・子どもたちが楽しく遊べるような遊園地のような施設をつくる

・大人が楽しめる、ゴルフの打ちっ放し練習場をつくる(有料で)

・健康をテーマにゆったりゆっくり自然の中で過ごす

・人と人とのふれ合いの場づくり

・人と人が力を合わせて掃除や植樹や花

・ゆっくり過ごす、自然と共生する

・河川敷にグラウンドなど、あるいはトラックなどの施設を造る

・子どもたちが川に触れられるエリアがほとんどないのが足羽川ばかりでなく県内河川の実態、ハード面だけでなくソフト面、教育現場などへの支援も必要なのではないか

・花壇、遊歩道、自転車道の整備

・中心市街地の住民が河川敷には入り(ボランティアでなく)、ゴミなどを集めるとその量に合わせて税金、スマイルバス、電車の運賃など安くなる

・きれい過ぎる程の水を十分流し、鮎をはじめ豊富な川魚を増やしていけば先は明るいのでは

・三世代家族の市民参加イベント(餅つきなど)(日祭日に市職員のボランティアで)

- ・河川敷の整備を各橋ごとに、特徴あるゾーン作り（世代間イベントを行う）
  - ・全市民ラジオ体操大会（健康満足度を高めるため）など、集客利用度を高める
  - ・市民が憩える場所として運動機能を持った土地整備（健康満足度高める）
- 2) 足羽川の利活用に市民、市民組織が企画、管理運営にもっと自主的に参加するには
- ・市、県がもっと開かれた会を設けて、本当に市民が望んでいる意見を取り上げるべき
  - ・楽しいイベントを定期的に
  - ・芝生広場だけでなく、使用料を必要とする施設ではあるが、他の同等施設より低料金に設定、その運営をする
  - ・小さなグループをつなげていく仕掛けが必要。環境を大事にしたいと考えている人、小さなグループは少なからずある。情報を集めることから始めてはどうか
  - ・PR、口コミ不足
  - ・郊外の市民も河川敷には入り、春は花見、夏は貸しボートなど人々が集まれば、周囲の店
  - ・若い大学生が企画、中心にできるような仕組みができやすくなったら参加の人が増えるのではないか
  - ・全国満足度No.1を勝ち取っている市民にとって、さらなる向上を進めるために今3.11を機会に隣近所のコミュニケーションの充実を計っていく。組織作りを、
  - ・福井全体を含めて、河川敷を運動に活用できるように（グラウンド整備）、管理運営は団塊世代（ボランティア）の活用によって動員数を図る
- 3) 中心市街地との連携をもっと強化するためには
- ・中心市街地が中心となる河川敷利用のイベントを行って集客力を上げる  
福井市の場合はやはり車社会なので駐車場対策が一番欠けていると思われる。地下に駐車場があるけれども市街地に寄与しているとは思われない
  - ・商店主を参加させ、話し合っけてベクトルを合わせる。一緒に！ということが大事
  - ・市街地の住民がどれだけ市街地を愛しているか、大事に思っているかに負うところが大きい。外部の人間がいつでも集まれる場所が福井には少ない
  - ・景勝地と中心地の道ができていない
  - ・中心市街地の中に年中無休などの公共機関を設置したりする、市（行政）が地元の意見をよく聞いてそれを（簡単に）実行にうつす方法がないと民間だけでは難しいと思うし、一番はソフトの面を充実させることだと思う
  - ・街中から河川敷そして街中への遊歩道づくり（歴史マップ掲示）
  - ・福井市の企画関係、商店街などの交流会
3. ワークショップ実施結果の特徴
- タイプは7割以上が①であった。発言内容からは特にタイプ別の特徴は明確には見えない。ただ、あくまで相対的比較であることを前提として、タイプ①は行動が積極的で、街の活性化、賑わいを求めており、ワークショップの傾向からも消極的な発言はなかった。提案の中で共通していえるのは次の内容であ

る。

第1に、アクセスの改善である。特に駐車場の利用改善は強く意識されていた。また自転車置き場が必要という意見は強かった。具体的には、足羽川の南側に無料の駐車場を作り、交通アクセスを簡単にする。また、駅前から河川まで無料レンタサイクル、無料周遊バスの運行と、わかりやすさのために、駅前から河川までを商店街化（緑化）通りに名称をつける等である。

第2に、利用についての規制の緩和についても積極的な意見が多かった。露店、売店などによる賑わいについても強調されていた。市民の立場から、使いやすいルール作り、簡単な手続きで、わかりやすい窓口、利用方法を明確に告知するという提案もあった。

また管理について、第三者的な民間委託型（窓口施設）、管理・運営できる団体に補助金を出す、地元市民がする、足羽川利用のために運営委員会を設けてはどうかという提案もあった。また、市役所内に県の出張所のように組織を作ってはどうか。県のどこに相談してよいかわからないし、管理している県の方から看板なり広く知らせるべきである。県・市のHPにわかりやすくリンクする等わかりやすい窓口を作ることが必要としている。また、県の河川課、市の公園緑地課両者の地域代表などでの共同運営組織、県と市の河川に対するコミュニケーションのとれた窓口を作る必要があるのではないか。福岡県直方市では国と県市の関係での連携はスムーズで、コミュニケーションがよくとれている。

第3に、河川敷の利用について、運動を通しての利用が提案されていた。例えば、サイクリングコースを作る、ランニングコースを

作る、8号線から花月橋くらいまでをつなげる、スポーツができる環境にする提案である。

第4に、足羽川の利活用に市民、市民組織が企画、管理運営にもっと自主的に参加することの意義も強調された。市が自治会に活用を任してはどうかという提案である。例えば、4月は旭地区、5月は日の出地区などである。兩岸の地区民で手分けして活動や清掃などの管理する。管理は役所・運営は民間の区分を、高齢者に管理を委託する（高齢者の活用）、近い地域の方々の神社の祭りの時は河川敷でも同じく、桜も含めて・住民たちが1年を通して花などの管理をするのである。住民による管理は、全国の先進事例ではいくつもの実践が見られる。興味深かったのは、堤防護岸に市民の手形パネルを作り、諸々の税金は無視して市民一人ひとりに1坪分買ってもらう自分たちの土地であると思ってもらう等ユニークな提案もあった。

第5に観光にももっと力を入れるべきという提案もあった。中心部に歴史的なものが多くあることから、屋形船、歴女向けツアー、駅前から出る駅前足羽川ルート的人力車、駅前から出る足羽川観光バスの運営、駅前から足羽川を桜でつなぐ等である。例えば、河川敷外堀化計画として足羽川を外堀に戻し、城下町とのイメージを関連づける。また、用水路を中心部（県庁お堀）と足羽川をつなげる（水の路）、桜の路を中心部にまで広げる、イルミネーションロードを作る（中心部→河川敷→足羽山）、桜橋から足羽山までの導線を（桜を植えて歴史、文化を感じる道路を）、駅前→幸橋→桜橋→足羽山までの周遊バス、幸橋と柴田神社の導線による一体化である。本研究でも広域的ネットワーク形成については

提案する。

中心部との連携の具体策では、中心市街地の店が出前で足羽川へ届ける（茶屋など）、暑いときに歩いたり買い物のとき川で涼めたりできるような設備をつける（川床）、買い物した人にお茶のサービス、買い物した人がゆっくり過ごせる休憩所づくりなどの提案である。

第6に、学生ワークショップでは、イベント（祭り）でのスタンプラリーで抽選に参加できる、祭りの提案があった。昼は駅前で実施し、夜は足羽川で実施する。足羽川と中心市街地の店舗とでスタンプラリー・キャンペーンの開催し、駅前の商店街と一緒に桜祭りをするというものである。駅前のイベント時には足羽川を会場にする（合同イベント）、足羽川河川敷を含めた広い範囲にまたがるイベントの開催することによって、中心市街地から気軽に足羽川へと足をのばせるようにする提案である。

#### 4. アンケート調査結果の特徴<sup>7</sup>

##### ①調査対象属性

男女ほぼ半々、70才以上（24%）がやや多いが年代はばらつき

住まいは「福井市足羽」を中心に2~3キロ圏内、居住年数は「20年以上」が過半

##### ②駅前の利用

「週1回」「月1回」が3割程度

##### ③足羽川河川敷の利用頻度

「非常によく利用している」4割、「通過するだけ」2割

##### ④足羽川の利用

誰と利用するか 「一人」7割、何をする

か 「散歩」8割

##### ⑤足羽川のイメージ

「市民の憩いの場」6割

「非常に誇らしい」4割、「まあ誇らしい」4割

##### ⑥足羽川河川敷以外のよく利用するところ

「足羽山」45.7%

##### ⑦足羽川の利用促進（自由意見）

マナーを守る ゴミ(5)、ペットのフン(3)、自転車と歩行者の接触回避

管理 県と市の管理が違う 目的が違うのか、雑草(3)、季節の花の整備(3)、駐車(3)、公園として管理、水害対策、休憩所

イベント 花火、ライトアップ、歴史との関連強化(3)

教育 学校の課外授業、

遊び 子供の遊び場(3)、川と戯れる、ボートの利用、歩きやすくする(3)、釣り

市民 ボランティアを増やす

##### ⑧中心街との関連強化（自由意見）

回遊性強化（アクセスの改善）

交通の便改善(4)、マップをつくる(2)、歴史をアピール(2)、バス便増加、無料駐車場(3)

PR 桜のアピール(3)、河川敷でもイベント(6)、駅前と連動したイベント、継続的なイベント、イメージアップ

管理 清掃、日陰、自転車のレンタル、雑草対策、休憩所設置、歩きやすく・散策(2)

案内所

事業許可 お店の出店、商店街

#### IV. 足羽川の利活用とまちづくりに関する 住民参加のあり方

本研究結論として住民参加による利活用の合意形成について整理する。第1は、住民参加型課題形成のプロセスについての整理と確認である。第2は、合理的な合意形成手法についてである。この合意形成は先進事例ヒアリングの中でも福岡県直方市、遠賀川の「夢プラン」の取り組みを結論の確認として取り上げた。また、共同研究者である神崎、今村両客員研究員の分析・整理、提案を掲げた。

##### 1. 住民参加型課題形成のプロセス

###### 第1段階 情報の共有…改善意識

危機感の共有、行政・市民組織・各主体の形成、「50年後の夢」のイメージの共有と公開

###### 第2段階 主体間の交流…相互理解・学習

参加者は個人の資格、関係者であっても参加は自由で組織を代表しない、専門家・学識者の存在・アドバイス、例えば、緩傾斜河岸、駐車場の整備

###### 第3段階 役割分担による実践…信頼関係の醸成

提案は義務を負う、勉強することは責任がある、市役所 市長の理解と命令を受けた職員（役職ではない、河川行政担当 地域の夢をかたちに変える役割

###### 第4段階 合意形成…何時まで、「誰が」を決めない

地域住民 特定はしない（代表していると思われる人）

##### 2. 合理的な合意形成手法

###### 事例のポイント

福岡県直方市、遠賀川の取り組みを例として住民組織・NPO法人「直方川づくりの会」運営の特徴

同組織は、野見山代表の人的ネットワークが大きな役割を果たしている。参加者は自由意思である。参加したい時に参加することが認められている。野見山代表は、「明日やめてもよい、来たい時に来てよい」をモットーにしている。会員になっても家庭の事情で1年以上、中には3年も出てこない人もいたという。また出てきた時に、「来たことを受け入れる」という。参加できなかったことを話題とはしない。参加者は男女半々である。人材バンクからも人材を確保しているが、女性は誘わないと参加しにくいという。いわば「緩やかに束ねる」ところが野見山代表の手法である。

合意形成のための会議のルールは、自分はどうしたいか、どうあって欲しい家について「50年後の夢」のイメージを語ることから始まる。参加者の「夢」の共有とそこで決まったことは公開する。地域住民は、NPO法人「直方川づくりの会」のメンバーが主体であるが、特定はしないという。実現性を高めるためには「代表していると思われる人」がキーワードである。これは発言に責任を持ち実行することが必要だからである。市役所の職員も参加するが、役職での参加ではない。市役所の中でも市長の理解と命令を受けた職員であることが必要である。河川行政担当は、地域の夢をかたちに変える役割をもつ。定期異動があるにしても地元の熱意を斟酌することが



役割となる。

参加者は個人の資格、関係者であっても参加は自由であくまでも組織を代表しないことがルールである。また、一方的な要望には終わらない。発言する以上実現に責任を持つこともルールである。

### 3. 遠賀川「夢プラン」合意形成の事例

直方市は市の西南部を流れる遠賀川の利活用について、地域住民と行政の合意形成が実現した例として差の合計性のプロセス、合意形成ができた背景について検証する。この検証は、遠賀川河川事務所長（当時）の松木洋忠氏の研究会での発表のまとめを引用した（一部修正）。

#### ①はじめに

福岡県直方市の遠賀川は、平成16年度から、複断面河岸の形状を改築し、全体を緩傾斜の河岸とする河川改修が進められてきた。河川事務所による設計の意図は、治水安全度の向上を図るだけでなく、にぎわいや生きものへの配慮を組み込んだ河岸の形成を意図したものである。しかし、この設計に至るまでには、地域住民や直方市役所との協働による、およそ十年間の構想練り上げの情熱を反映させたものである。ここでは、地域住民の取り組み、市役所の積極的な関わり、学識経験者の専門的なアドバイス、完成後の河道特性の観点から、本事業の合意形成の特徴を分析する。

#### ②遠賀川水辺館について

遠賀川と彦山川が会う中州に「遠賀川水辺館」がある。この情報発信・交流施設は、平成16年10月にオープンしたものである。

ここは、川づくりとまちづくりについて、考え、学習し、行動する拠点施設として年間を通じて直方市民や周辺の住民に利用されている。水辺館では、地域の自然や歴史を学習する場を提供しているだけでなく、水生生物調査、体験カヌー、ミミズ掘り、釣りなど、遠賀川と河川敷を活用した体験型の活動メニューが準備されている。毎週末にイベントが行われ、平日（月曜休館）も利用を受け付けていることから、建物の内と外は、「いつも」、「誰かが」集まってくる空間である。

また、市内外からのアクセスがよく、清潔なトイレがあり、開放的な施設であることから、公共的な行事の場としても利用されるようになってきている。例えば、乳幼児検診、読み聞かせ会、環境教育研究会などの利用が多くなっている。さらに、平成19年10月には福岡県内唯一のフルマラソンが、水辺館をスタート・ゴールにして開催されている。

開館以来、まもなく5年を迎えるが、水辺館と遠賀川河川敷が、地域を交流拠点として機能するようになってきている。

このような多角的な施設利用は、NPO法人「直方川づくりの会」の自発的で献身的な運営によるものである。今回の河岸整備は、水辺館を中心とした河川利用の実態と将来性を踏まえ、実施されるものであることから、水辺とのふれあいや、水面の見通し、さらに親しみやすい河川景観の形成が、事業の重要な目的となっていた。

#### ③「夢プラン」方式の合意形成

整備イメージの具体化にあたっては、平成16年10月に発足した「遠賀川を利活用してまちを元気にする協議会」が中心となって合意形成が図られた。協議会には、野見山氏が

中心とする住民を代表するひとや直方市長、学識経験者が参加している。

河川改修については大きな意見の相違はなかったが、利用頻度の少なかった水上ステージの埋め戻しや、市民駐車場の移設については、賛成・反対の立場から、顔を紅潮させながらの意見交換が行われた。事務局でもある河川事務所としては、合意点を見つけるに至らないこともあったが、自由な意見交換を原則として双方の意見を十分に聞くという姿勢で運営にあたった。

この状況で議論が収斂していった背景には、「遠賀川夢プラン」の存在がある。プランの副題は「遠賀川の将来についての提案書」となっており、平成8年から活動している地域住民グループが十年前に作成したものである。作成にあたってグループのメンバーは、河川管理について勉強し、国内外の他河川の事例を調査し、行政職員とも意見交換した上で、河川事務所や市役所に対する提案を示すとともに、プランを公開してより多くの住民の意見を募り続けてきた。この活動は環境学習などの住民活動を開始し、現在も継続している。

「夢プラン」の特徴は、「ふるさとの地域や川が、いつかこんなになったらいいなあ」というイメージの共有を図ることを目的としていることにある。さらに、「誰がいつまで」という義務を負わせていない。この戦略的なあいまいさが、多くの関係者の参加を可能にし、自由な発言を引き出すことに繋がっている。

地域づくりにあたって合意形成を図るのは、必ずしも容易ではないが、「夢プラン」方式は、誰でも知ることができ、意見を言う

チャンスがあるという点で、住民と行政の合意形成における一つのモデルを示したものを位置づけることができる。

#### ④学識経験者の知恵

協議会の合意形成には、「まちを元気にする協議会」に参加している生態系や土木の学識経験者の存在も大きなものがあった。

専門的な知識経験に基づく見識が重要であることが論を待たないが、専門家ではない地域住民の知識レベルを向上させたことについて大きな役割を果たした。知識のある地域住民は、知識のない方々への説明者となり、議論の繰り返しを抑制する建設的な運営に効果があった。

学識経験者が、専門的な観点、および、地域外からの視点から意見を述べたことも、今回の合意形成に必要な要素であった。専門的な知見を持った上で、大局観のあるコーディネートをすることが、意見の対立の起こりうる合意形成には欠かせないことを示している。

また、議論を収束させるために不可欠だったのが、大学の協力を得て作成した大型模型であった。「百論は一見に如かず」であり、平面図やパースではイメージしにくい空間の感覚が得られやすくなる。何より、手と目を使って共同作業を行うことが、発言に責任感を持たせ、協議会全体の理解を深めるために必要な物であった。同じものを見ながら、イメージを共有した上で意見し合うことが、住民参加型の川づくりのために極めて重要な役割を果たしている。

特に学識経験者の工学的な助言を得た中では、河川敷の勾配に変化をつけたことが施工後に、住民の方から高い評価を得た。それは、

地形の微妙な変化を与えたことである。遠目には平面的に見える緩傾斜も、その上を歩くと河川の縦断方向にも横断方向にもなだらかな起伏がつけられている。これは設計段階では必ずしも理解されていなかったが、実際の芝生の上で確認作業を行った際に、空間の広さを感じ、視覚にも微妙な陰影があって、落ち着いた自然な風景を演出していると高い評価を得た。

また、微妙な地形の変化は、洪水時の河川への注意喚起の意味で効果的である。緩傾斜の川岸を濁水が近づいてくることを視覚的に確認できる。従来、洪水時の水位情報は、水位標や橋脚などの鉛直的な水位変動から得られていたが、水平方向の理解しやすい情報が、水防活動をやりやすくし、住民の避難行動を促すことを期待している。

設計時に考慮されていなかった効果は、川に向かって緩傾斜を持ち、除草の行われた川岸には、洪水後のゴミがたまりにくいことである。このことは、ゴミが当該区間を通過して下流に流化していることを意味しており、流域として効果と位置付けることはできない。別途、流域全体を視野に入れた河川のゴミ流出防止、収集排除について検討を要する課題である。

#### ⑤直方市役所の管理

河川事務所は、整備の行われた河川敷は、直方市に対して占用を許可している。市がリバーサイドパークとして管理、運営していることから、河川敷は市民による日常的な利用がなされ、大規模なイベントの舞台ともなっている。

大面積の芝生では、日常の管理で最も重要なのが草刈りである。この河川敷一帯は約

30万㎡もの芝生広場となっているが、直方市では夏期毎週、冬季隔週の芝刈りをしており、広場は一年を通じて見晴らしのよい丘陵景観を維持している。そのため、ジョギングや犬の散歩などの利用はもとより、なだらかな形状の上の通勤・通学路ともなっている。

また、公園の一部はオートキャンプ場として利用されている。国道の脇にあり、まちに隣接した立地ではあるが、アクセスのよさ、静かな喧噪による安心感を提供しており、利用者のいない週末はない。

イベントでは、春のチューリップまつり、夏の花火大会、秋の産業まつりが盛大に行われている。このとき河川敷は、一面が弁当広場になったり、観客席になったり、催し物会場になったりと様々な形態で、緩やかな傾斜が巧みに利用されている。

さらに直方市では、公園全体（水面を含む）に対して傷害保険を掛けている。親水性に配慮した河川整備が行われていることから、利用される方の怪我などの不測の事態が発生した場合には、公共空間としての適切な対応が可能となっている。

このような完成後の市役所による管理の実績と計画も、「夢プラン」の実現のために不可欠であった。何よりも、夢を語り合う段階において、市役所が、将来の管理体制を考えながら、住民や河川事務所との意見交換に参画したことが、直方の川づくりの成功の元であったと言える。

さらに、議論の過程では、住民活動の限界や河川事務所の所管範囲をこえる懸案も解決しなければならない。そのような場合に、直方市からは、議論を引き取りながら収束させるほか、「できないものはできない」と現実

的な結論付けを行うなど、合意形成を効果的に進める意向を示した。川づくりの実務に当たっては、地域市町村の積極的な参画が不可欠である。

#### ⑥河川管理者にとっての「夢プラン」方式

直方の緩傾斜河岸の整備は、十年前からの住民のユメをカタチにしていく事業であり、現在も進行中である。その中で、今回の河川工事は行われたものであり、地域にとっては「夢プラン」のイメージを実現するための手段として用いられた物である。

これを河川管理者の立場で、「夢プラン」の特徴を整理すると、次の3点が重要である。

- ・イメージの共有
- ・学識経験者の知恵
- ・市町村の積極的な参加

なお、この河岸整備にあたっては、河川事務所は常にマスコミに対して情報提供を行った。マスコミの取り上げ方としては、計画や工事をテーマとするものではなく、参画する地域住民の姿を伝えるものが多かったことを付記しておく。

以上のように、遠賀川の河川整備にあたって取り入れた「夢プラン」方式についてその特徴を取りまとめた。この方式は、直方の地域文化の中で有効に機能していると考えている。同様の方法がすべての河川に適用可能とは言えないが、今後の国内外の河川管理にあたって「夢プラン」の3つの特徴を踏まえた方法を検討することを提唱する。

#### 4. 事例から見た地域住民参加の足羽川利用提言

「ワークショップ・アンケート・インタビュー

一を通しての提言」(神崎洋治客員研究員)はじめに

足羽川は福井市民にとって街を形成するために過去にも現在も未来も、必要で不可欠な市民の重要な自然財産である。

しかし、その存在価値、利用価値の重要性に比べ、足羽川利活用や河川改修時に市民が直接参加し行政と真剣な議論をしたことが少ないように思える。今回の激甚災害特例法による河川改修においてももっと市民目線の議論を反映させてもよかったであろう。足羽川は福井市民が自分事になって議論に参加できる大切なファクターである。

管理者と利用者との構図から、市民、国土交通省河川局、福井市が役割を自覚したうえで、垣根を越えて一体になり市民を巻き込んで利活用を議論することが、貴重な市民の財産である足羽川利活用への最も近道である。

#### ①市民と行政のまとめ役組織

河川利活用は、使用する市民と管理する行政とのまとめ役としてNPO法人組織が機能し、管理運営をするのが望ましい。福井県には、九頭竜川水系全般のまとめ役として、NPO法人ドラゴンリバー交流会が存在する。本来、NPO法人は河川の積極的な住民の利活用を促し、かつ、環境整備までをコーディネートする組織として期待されている。ドラゴンリバー交流会が把握するいくつかの団体が市民の期待する活動を年間通じて数多く実施しているが、一般市民に対してのアピールはまだまだ充分ではなく今後十分に検討する必要がある。原因はどこにあるのか、今回調査した福岡県直方市を流れる遠賀川の「NPO法人直方川づくりの会」や東京都の「NPO法人荒川クリーンエイド・フォーラ

ム」と対比してみると基本的な事項に違いがあることに気づく。

ドラゴンリバー交流会の事務局は行政職OBの役員が配置され、本来の目的は江端川、荒川の水門管理であり、並行して九頭竜川水系の活動団体のまとめ役である。目的に記された内容は「水系環境に関わる幅広い人たちに対して自然と人との共生を基本理念として、水系環境保全活動を行い豊かで潤いのある水系環境の保全と創造を図ることにより、流域内の活性化に寄与することを目的とする」とある。

このNPOは個人会員よりも下部組織で法人会員が多い。法人組織が多いのは足羽川の清掃活動参加が目的であり、足羽川の景観を市民で守りたいとの理念で参加している企業がある。清掃活動に参加する団体には、日常的に足羽川の利活用に積極的に関与する会員はほとんどない。年間活動として単発的に福井県、市、各公民館、漁協、地区の菜の花フェスタ実行委員会、野鳥の会などが活動をしている。

東京都の「NPO法人荒川クリーンエイド・フォーラム」と福岡県直方市の「NPO法人直方川づくりの会」は理事長が一般市民であり、運営もすべて市民のボランティアで行われていて自発的で献身的な運営によるものである。

福岡県直方市は、NPOの拠点施設として情報発信・交流施設の「遠賀川水辺館」がある。遠賀川の河川敷内にあり清潔なトイレがあり、開放的な施設であることから公共的な行事の場としても利用されている。たとえば乳幼児健診、読み聞かせ会、環境教育研究会、水生生物調査、体験カヌーなど体験型から地

域交流型まで幅広く「いつも」、「誰かが」集う交流会館である。

この施設が発足する経緯は、行政サイド（国交省河川管理局・直方市）の大局的で高レベルな合意形成手法や意識レベルの高い住民活動が、お互いにリスペクトしながら、50年後の「夢プラン」を描きながら究極の議論を経て15年余かけて継続している。

この施設には絶えず国、市、住民が職域、役職を超えて集い、河川の環境保全、市民の利活用や水辺館運営のディスカッションの場が存在する。

要約すれば、足羽川のNPOは行政主導で、さまざまな組織を下部に持ち、それぞれの組織の活動を促進している。自らの組織は実行部隊ではない。

荒川のNPOや遠賀川のNPOは住民主導であり、即活動の実行部隊でもある。行政は後見人が相談役的存在である。情報発信も住民組織が責任を担って行っている。

## ②足羽川上流の取り組み

足羽川は、源を池田町冠山に発し、旧美山町を流れて福井市内に入り福井市西部で日野川と合流している。上流の池田町の取り組みについて杉本町長にヒアリングした。有機農業の促進と生ごみの堆肥化促進、また、町内を流れている足羽川に「かずら橋」をかけて観光地化した取り組みをしている。河原の清掃は雪解け時期に町民総出で清掃活動を行っている。上流の責任ある意識が池田町の活動にリンクしている。美山地区では区民の活動が活発で、「NPO法人美山まちづくり」が中心となり地区活性化の組織が機能している。高齢者も多くがこの組織に参加して活動をしている。

③市民の利活用状況

足羽川の利用状況（県河川課資料，NPOドラゴンリバー資料他）

環境文化研究所：Eボート川下り（4月）：  
川に学ぶ体験教室（8月）

足羽川漁業組合：鮎稚魚放流（5月）：サクラマス稚魚放流（11月）：魚釣教室（10月，11月）

NPO法人ドラゴンリバー交流会：鮎のつかみ取り体験（8月）：自然と親しみ遊ぼう会  
福井大学カヌー部：カヌー体験教室（9月）  
菜の花フェスタ実行委員会：菜の花フェスタ（4月）

（財）日本野鳥の会：野鳥観察会（11月）  
福井市：夜間景観ウォーク（4月）：桜祭り（4月）

各種団体，個人：春の足羽川清掃（3月）  
さわやか福井ジョギングクラブ：福井トリムマラソン大会（6月・8月）

アースライドフェスタin福井実行委員会：  
足羽川サイクリング（9月）

和田地区街づくり委員会：健康ウォーキング（11月）

日本愛玩動物協会：犬のうんち拾いキャンペーン（11月）

福井県主催：ふくいまちかどコンサート（7月）：花火大会（7月）

福井県・福井市共催：足羽川げんきフェスタ（11月）

市民の期待する足羽川の利活用法のポイント  
市民に足羽川でアンケートを取り，またワークショップで活発な意見交換を行った結果のポイントは次のとおりである。

- ・利活用を促す市の広報活動を積極的に行う。

- ・マスコミを取り込んで足羽川河川敷特集を取り上げてもらう。
- ・福井市民は自動車利用率が高く「駐車場の確保」は不可欠である。
- ・河川敷駐車場に移動式トイレを設置
- ・住民の利活用参加を増やし，清掃活動の回数も増やし「きれいな河川敷や川の流れ」を維持する。
- ・利用する時の管理者の顔が見えるように川の近くに管理事務所を設置。
- ・国・県は市民組織が管理運営に積極的に関与する方法に変更し，開かれた会を設けて市民が望んでいる意見を絶えず吸い上げると良い。
- ・イベントを実施する告知を積極的に行う。
- ・河川敷の芝生利活用で高齢者のマレットゴルフ場を設置。
- ・県内の大学生が活動するようなイベントを仕掛けて若者の利活用促進をする。
- ・無機質なコンクリート階段に潤いの花壇を設置。
- ・福井マラソンを市内から九頭竜川水系に変更して実施。
- ・福井夏祭りの「よさこいおどり」を河川敷で実施。
- ・親水性を子供のころから教育の一環として行う。学校の自然科学教育の現場に河川敷を利用する。特に流域の小中学校中心に実施。
- ・中学生，高校生，大学生の陸上部の部活に利用しやすくする。

上記のような貴重な意見が市民の目線から出てきた。どれも利活用としては納得性の高い事項である。

④まとめ

足羽川の利活用は県が中心となって現在実

施しているが、他県にみられるように行政よりも民間のNPOが管理運営を行っているところが成功している例がある。行政は後方支援のスタンスで市民活動を支える立場にいる。

民間主導のNPO法人を設置して、その組織の積極的な関与で市民目線の運営管理を与え、将来の足羽川のあるべき姿を描きながら利活用を推進してゆけば、市民が四季を通じて憩える川になると確信する。

現在利用されている近隣の住民のウォーキングや、中学生から大学生までの若者が活発に活用できる場所であり、高齢者が軽スポーツに集える芝生の河川敷公園である。また幼児が保護者と遊ぶ芝生の河川敷でもある。この機会に、行政は規制枠をかざすのではなく、足羽川が本来の市民の憩える場所に活用できる方策を市民目線で作り上げるよう期待する。

最後に室生犀星が明治時代に足羽川を読んだ詩がある。冬のころ4年ぶりに足羽川の土手に立ち堤防の桜が成長している姿をいとおしく思い、緑深い情景を思い起こして読んだ詩である。

足羽川 室生犀星  
あひ逢はず よとせとなり  
あすは川みどり こよなく濃ゆし  
をさなかりし桜も のびあがり  
うれしやわが手に そいきたる  
わがそのかみに 踏みも見し  
この土手の芝と うすみどり  
いまふゆ枯れはてて いろ哀しかり  
われながき旅より かへり  
いま足羽川のほとりに 立つことの  
なにぞやおろそかにも 涙ぐまるは

## 5. 広域的なまちづくりにおける回遊性の検討

(今村善信客員研究員)

アンケートからもわかるように、足羽川を訪れた市民がその足で足羽山を訪れることも、エキマエや順化・宝永・木田地区といった周囲のまちを訪れることもほとんど見受けられない。物理的な空間として離れていることも一因であるが、大きな要因としては以下の2つが考えられる。

1つ目の要因は、必然性がないためである。当たり前のことだが、必然性がなければ、目的地以外の場所に行くことはない。2つ目の要因は、回遊してみたいと思わせる動機がないためである。動機がなければ、目的地以外の場所についてみようと思うこともない。

しかし、これらのことを逆から見ると、2つの仮説を導き出すことができる。1つ目は、「必然性さえあれば、市民は2箇所以上の場所を回遊する」、ということである。2つ目は、「動機づけができれば、市民は2箇所以上の場所を回遊する可能性が高くなる」、ということである。これら2つの仮説に基づき、以下では5つの方法で必然性と動機づけを提案したい。

### ①屋外駐車場としての再整備

こちらの方法は、必然性による回遊にあたる。足羽川・足羽山・周囲のまちを訪れる際、ほとんどの市民は車を活用する。足羽川の河川敷を40年前のように屋外駐車場として整備することができれば、特に足羽川と周囲のまちの間では回遊する必然性が生まれると考えられる。

### ②コミュニティバスによる回遊

以下の4つの方法は、動機づけによる回遊

にあたる。

現在、福井市中心部を4路線のコミュニティバスが周回しており、浜町や愛宕坂には停車するものの、川及び河川敷のすぐ近隣に停車することはない。川及び河川敷のすぐ近隣に停車するようになれば、コミュニティバスを利用する市民にまちと河川敷を回遊させることができる可能性は高い。

### ③まちあるきのルート設定による回遊

福井市中心部・足羽川・足羽山には多くの銅像や記念碑が多く設けられている。しかし、残念ながらその多くは市民にもあまり知られ

ておらず、観光客にもうまく広報されてはいない。また、その多くが「点」として存在しているに留まっており、「線」として結ばれていない。

写真3-1から3-8は、これらの「点」を幕末の偉人の銅像、という視点から捉えたものである。この8点の銅像を巡るまちあるきのルート設定をきちんと行い、市民を含めた多くの方にPRできれば、福井市中心部と足羽川、そして足羽山を回遊させることができる可能性は非常に高い。

写真3-1 中根雪江像（神明公園内）



写真3-2 松平春嶽像（市郷土歴史博物館前）



写真3-3 岡倉天心像（中央公園内）



写真3-4 由利公正像（中央公園内）





写真3-5 横井小楠と三岡八郎像（内堀公園内）



写真3-6 日下部太郎とグリフィス像（足羽川堤防）



写真3-7 橋本左内像（左内公園内）



写真3-8 橋曙覧像（橋曙覧記念文化館庭内）



#### ④「ハレ」の場への回遊

足羽川の河川敷は、福井市中心部において数千人規模のイベントを行うことのできる数少ない「ハレ」の場所である。これまでもふくい春まつりやふくい秋の収穫祭など、多くのイベントが開催されてきたが、芝生の養生のため2008年からの3年間、「ハレ」の場所としての機能を提供できずにいた。河川敷が再び大きなイベントを行うことのできる「ハレ」の場所としての機能を提供できるようになれば、まちと河川敷を回遊させることができる可能性は高い。

#### ⑤景観の統一による、連続性の演出

歩いてみたくなる動機づけとして、景観に統一性があることも要因として考えられる。

写真5-1と5-2は幸橋から九十九橋にかけての堤防沿いの遊歩道を、写真5-3から5-6は幸橋から愛宕坂の間の道路を写したものである。遊歩道は同じコンセプトのもと続いており、思わず歩いてみたくなる景観を作り出している。一方、幸橋から愛宕坂の道路は橋の北側は整備されているものの、橋の南側は途中から電信柱が見えたり、舗装のされ方も異なってしまうたりしている。特に、左内の交差点を越えてからは全く景観としての統一もない。これらの景観に留意して統一性のあるものとする如果能够できれば、思わず歩いてみたくなる道路となり、河川敷と足羽山を回遊させることができる可能性は高い。

写真5-1 幸橋から桜橋（北側堤防）



写真5-2 桜橋から九十九橋（北側堤防）



写真5-3 桜橋（北側から）



写真5-4 桜橋から愛宕坂（橋通過直後）



写真5-5 桜橋から愛宕坂（福井信用金庫前）



写真5-6 桜橋から愛宕坂（左内交差点）



資料① アンケート調査票

『足羽川の利活用』についてのアンケート

調査時間 時 分 調査地点 調査担当者

●性別 男 女 ●年齢 20才未満 20代 30代 40代 50代 60代 70才以上

●お住まいはどちらですか？具体的にお書きください。

{ } 県 { } 市 { } 町

●今のお住まいで暮らし始めて、どのくらいになりますか？

{ } 年

●中心市街地(エキマエ)にはよく出かけられますか？

ほぼ毎日 週に1回くらい 月に1回くらい イベントがあれば 全く行かない

●あなたと足羽川の関わり方について質問します。

1. あなたは足羽川の河川敷をよく利用しますか？

非常によく利用している たまに利用している イベントがあるなら 通過するだけ

2. 足羽川を主に「どなた」と「どのように」利用されていますか？具体的にお書きください。

{ } と { } で利用している

●足羽川という場所について質問します。

1. 『足羽川』と聞いて、どんな場所だとイメージしますか？

市民の憩いの場 観光の場 水と親しむ場 水を恐れる場 その他( )

2. 足羽川は、あなたにとって誇らしい場所ですか？

非常に誇らしい まあ誇らしい あまり誇らしくない 全く誇らしくない

3. 足羽川を県外の友人や知人に紹介したことはありますか？

よく紹介している たまに紹介している 数えるほどなら 紹介しない

4. あなたのイメージに近いのは、次のうちどちらですか？A・Bそれぞれ1つずつお答えください。

A 足羽川の目指すべき方向 環境の安定性を重視すべき 中心街の活性化に活用すべき

B 都市の重視すべき役割 生活文化歴史を重視すべき 都市の賑わいを重視すべき

5. 足羽川についてもっと活用できるようにするには何が必要だと思いますか。

{ }

6. 足羽川と中心市街地(エキマエ)のつながりを強くするためには、どんなことが必要だと思いますか？

{ }

7. 足羽川以外によく行く福井の好きな場所はどこですか。いくつでも

- (1) 足羽山 (2) 駅西口中心街 (3) 西武百貨店 (4) 市役所・中央公園 (5) 県庁・福井城址  
 (6) 北の庄城址・柴田神社 (7) 片町飲食街 (8) 郷土歴史博物館・養浩館庭園 (9) アオッサ・駅東口地区  
 (10) 駅前広場・駅ナカ商店街 (11) (その他 )

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

資料② 足羽川利用実態調査結果

回答者属性

性別 男 回答数 35 構成比 53.8% 女 回答数29 構成比44.6% 無回答1 総回答数65

年代	20歳未満	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	無回答	合計
実数	3	9	7	9	9	12	15	1	65
構成比%	4.6	13.8	10.8	13.8	13.8	18.5	23.1	1.5	100.0

住まい

	回答数	構成比
福井市足羽	8	12.3%
福井市つくも	7	10.8%
福井市中央	5	7.7%
福井市木田町	2	3.1%
福井市花堂	2	3.1%
福井市宝永	2	3.1%
福井市渡	2	3.1%
福井市有楽町	2	3.1%
福井市内1名の町名 浅水、運動公園、大宮、御幸、片町、加茂が原、 北四ツ居、毛矢、左内、田原、文京、松本、 桃園、若杉	14	21.5%
福井市（町名不明）	13	20.0%
福井市小計	57	87.7%
永平寺町	4	6.2%
越前市、越前町各1	2	3.1%
県外	2	3.1%
合計	65	100.0%

住み始めてどのくらい経つか

	回答数	構成比
1年以内	3	4.6%
2年～5年	6	9.2%
6年～10年	8	12.3%
11年～20年	9	13.8%
20年以上	37	56.9%
無回答上	2	3.1%
合計	65	100.0%

中心市街地(エキマエ)の利用頻度

	回答数	構成比
ほぼ毎日	13	20.0%
週に1回くらい	20	30.8%
月に1回くらい	21	32.3%
全く行かない	7	10.8%
その他	4	6.2%
合計	65	100.0%

他の意見:週に1回くらい、年に1回くらい、イベントがあれば(2)

## 足羽川の利用

	回答数	構成比
非常によく利用している	25	38.5%
たまに利用している	13	20.0%
イベントがあるなら	8	12.3%
通過するだけ	15	23.1%
その他	4	6.2%
合 計	65	100.0%

その他の意見:よく利用する(2)、初めて(2)

## 足羽川を誰とどのように利用するか(複数回答)

	回答数	構成比
一人	44	65.7%
友人	8	11.9%
家族	11	16.4%
その他	1	1.5%
無回答	3	4.5%
合 計	67	100.0%

その他の意見:犬

## 足羽川を誰とどのように利用するか

	回答数	構成比
散歩	49	69.0%
ジョギング	3	4.2%
自転車	3	4.2%
イベント	2	2.8%
買い物	2	2.8%
通学	1	1.4%
花見	4	5.6%
用事があるとき	1	1.4%
散策	1	1.4%
通過	2	2.8%
無回答	3	4.2%
合 計	71	100.0%

## 足羽川のイメージ(複数回答)

	回答数	構成比
市民の憩いの場	36	54.5%
観光の場	7	10.6%
水と親しむ場	10	15.2%
水を恐れる場	2	3.0%
その他	11	16.7%
合 計	66	100.0%

その他の意見:お花見や花火とか散歩コース、あまりイメージがない

足羽川は誇らしいか

	回答数	構成比
非常に誇らしい	28	43.1%
まあ誇らしい	28	43.1%
あまり誇らしくない	2	3.1%
全く誇らしくない	3	4.6%
その他	3	4.6%
無回答	1	1.5%
合 計	65	100.0%

その他の意見:どちらともいえない(3)

足羽川を県外の人に紹介するか

	回答数	構成比
よく紹介している	9	13.8%
たまに紹介している	15	23.1%
数えるほどなら	13	20.0%
紹介しない	27	41.5%
その他	1	1.5%
合 計	65	100.0%

その他の意見:桜は紹介する

足羽川のイメージ

	回答数	構成比
安全性を重視すべき・歴史、自然重視し環境を守るべき	18	39.1%
安全性を重視すべき・都市の賑わい、発展に活用すべき	4	8.7%
中心街の活性化に活用すべき・歴史、自然重視し環境を守るべき	14	30.4%
中心街の活性化に活用すべき・都市の賑わい、発展に活用すべき	10	21.7%
その他	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合 計	46	100.0%

足羽川以外によく行く福井の好きな場所(複数回答)

	回答数	構成比
足羽山	21	45.7%
駅西口中心街	3	6.5%
西武百貨店	5	10.9%
市役所・中央公園	2	4.3%
県庁・福井城址	3	6.5%
北の庄城址・柴田神社	1	2.2%
片町飲食街	2	4.3%
郷土歴史博物館・養浩館庭園	2	4.3%
アオッサ・駅東口地区	4	8.7%
駅前広場・駅ナカ商店街	1	2.2%
その他	16	34.8%
合 計	60	130.4%

その他の意見:朝倉遺跡、図書館、美術館、東尋坊、永平寺、越前市、愛宕坂、競輪場、永平寺・朝倉遺跡、エンゼルランド、越前海岸

**【参考文献】**

- ・宇野史郎 (1988) 『現代都市流通のダイナミズム』 中央経済社
  - ・ (財) 世田谷トラストまちづくり (1992) 『参加のデザイン箱』 世田谷まちづくりセンター
  - ・ (財) 世田谷トラストまちづくり (1996) 『参加のデザイン箱part-2』 世田谷まちづくりセンター
  - ・ (財) 世田谷トラストまちづくり (2002) 『参加のデザイン箱part-3』 世田谷まちづくりセンター
  - ・ (財) 世田谷トラストまちづくり (2002) 『参加のデザイン箱part-4』 世田谷まちづくりセンター
  - ・ Arnould, Fric J. and Tompson, Craig J. (2005) “Consumer Culture Theory (CCT) : Twenty Years of Research” *Journal of Consumer Research* 2005 Vol.31 pp.868-882. 草野泰博訳 (2011) 「現代のまちづくりと市民参加」 『流通』 No.26 日本流通学会
  - ・ Miku Feathstone (1991) ” Consumur Culture & Postmodernism” *English Langeage edition published by Sage Publications of London* 小川葉子・川崎賢一編著訳 (2003) 『消費文化とポストモダニズム 下巻』 恒星社厚生閣
- 3 本稿p.68以降に詳述してあるので参照のこと
  - 4 Miku Feathstone (1991) 小川葉子・川崎賢一編著訳 (2003) pp.21-37
  - 5 Arnould, Fric J. and Tompson, Craig J. (2005) pp.868-882. 草野泰博訳 (2011)
  - 6 宇野史郎 (1988) p.105
  - 7 調査結果の詳細は稿末資料 (p.79以下) 参照のこと

注)

- 1 「1概要 (要約)」は、今村客員研究員のプレゼンテーション報告の内容をベースとしている。
- 2 「Ⅱ. 住民参加に関する理論の整理と方向」 (p.58) に詳述している。